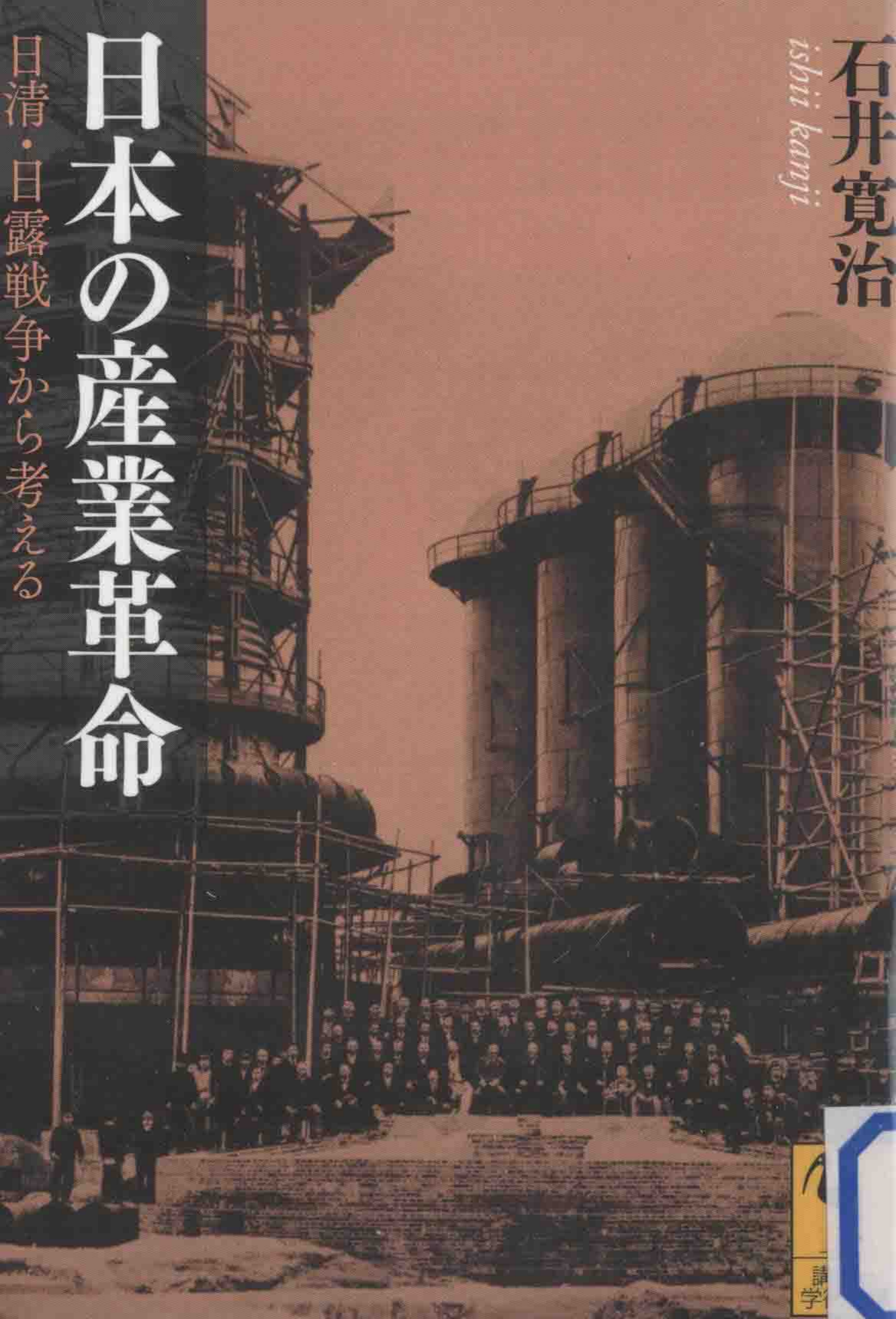


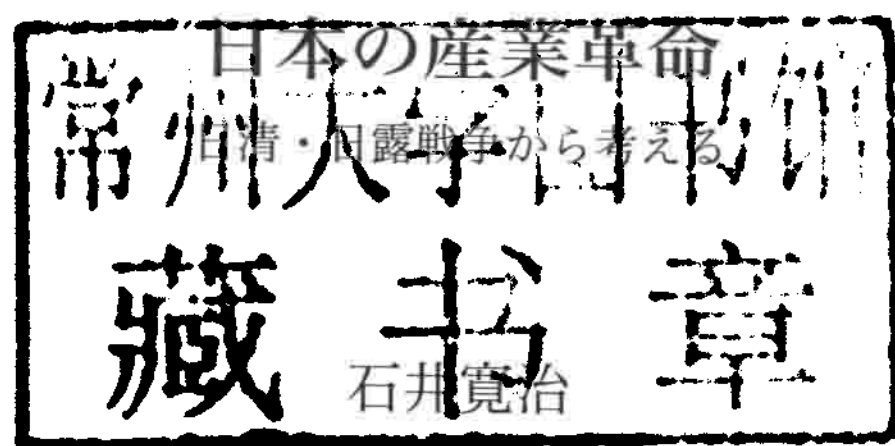
石井寛治

ishii kanji

日本の産業革命

日清・日露戦争から考える





講談社学術文庫

石井寛治 (いしい かんじ)

1938年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。東京大学大学院経済学研究科教授、東京経済大学経営学部教授を経て現在、東京大学名誉教授、日本学士院会員。経済学博士（東京大学）。専門は日本経済史。著書に『日本経済史』『開国と維新』『日本の産業化と財閥』『近代日本金融史序説』『帝国主義日本の対外戦略』ほか多数。



定価はカバーに表示してあります。

にほん さんぎようかくめい
日本の産業革命
につしん にちろ せんそう かんが
日清・日露戦争から考える
いしい かんじ
石井寛治

2012年12月10日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 豊国印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

© Kanji Ishii 2012 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R]〈日本複製権センター委託出版物〉

ISBN978-4-06-292147-3

目次

日本の産業革命

序章 今なぜ産業革命か？……………11

パラダイム転換への模索 近代社会と市場経済 産業革命の
否定論 日本の産業革命をどう分析するか

第一章 外資排除のもとでの民業育成……………21

日本産業革命の前提（一八七三～一八八五）

1 一九世紀末大不況のなかの日本経済 21

「外圧」に抗しての維新変革 一八七三年恐慌と先進国の大不

況 アジアの銀本位国 幕藩営工業と明治官営事業

2 民間産業の育成策 30

岩倉使節団の海外視察 「征韓論の西郷」対「殖産論の大久保」

「国の強弱」は「人民の貧富」による 外資排除の殖産資金

3 活躍する商人 44

貿易商人の資金蓄積 為替取引のネットワーク 平民資金で

発展する金融業 製糸業にみる「企業勃興」 輸入圧力にさ

らされた在来織物業

4 世界恐慌と松方デフレ 58

紙幣整理と軍拡の同時遂行 豪農の没落、政商の躍進 没落
小生産者が賃金労働候補者に 有力ベンチャー企業、出現する

第二章 対外恐怖からの対外侵略……………73

産業革命の開始と日清戦争（一八八六～一八九五）

1 増加する輸出 73

欧米への生糸・米穀の輸出 アジア市場向けの銅と石炭

2 資本制企業の勃興 77

巨大株式会社、鉄道資本の始動 追い出される輸入綿糸 鉤

山業が守り立てる財閥 拡大する生糸・織物の国内市場 一

八九〇年恐慌と日本

3 日清戦争への道 97

変化する政府と民党の対立点 内地雑居尚早論と現行条約励行

論 欧米商人・中国商人への恐怖 日清戦争開始への道

4 戦争を支えた経済力 110

日本銀行が資金をばらまく 日本軍の兵器と戦闘力 鉄道と
汽船で兵員をスピード輸送

第三章 帝国の利権をめぐる日露対決……………120

産業革命の展開と日露戦争（一八九六～一九〇五）

1 東アジアの帝国主義 120

露独仏三国による干渉 韓国で深まる日本の経済支配 韓国
単独支配の方針へ 最初の植民地台湾の経営 軍拡に偏した
戦後財政

2 資本制企業の展開 137

日本も金本位国へ 資本輸入を解禁したもの 日清戦後の
企業勃興 整備される間接金融体制 運輸・通信システムの
近代化 綿業での工場制と問屋制 絹業でのマニユファクチ
ユア 大小さまざまな機械工業 中国大冶鉄山に頼る八幡製
鉄所 恐慌で始まる企業集中

3 階層分化と出世回路 177

- 農村地域を巻き込む産業革命 近代都市での人口漸増 拡大
する地主制と巨大地主の欠如 「田舎紳士」でも「富豪専制」
でもなく 階層を貫く出世回路Ⅱ教育
4 総力をあげての戦い 192

京都無鄰庵での政府首脳の決断 英米と独仏のための代理戦争
開発される近代軍事技術 兵士と資金の大動員体制 戦場と
しての韓国と中国

第四章

無賠償のかわりに朝鮮・満州を……………
産業革命の終了とアジア侵略（一九〇六～一九一四）

- 1 累積する外債 209

一九〇七年恐慌——初の全般的過剰生産恐慌 織物業ですすむ
機械化 機械と鉄鋼の自給見通し 普及する電灯と電動機
貿易赤字のもとで累積する外債

- 2 揺らぐ天皇制国家 229

財閥を頂点とする富豪たち 急成長する三井物産と三菱造船

富豪の日常生活——三井家と島津家 労働運動の「冬の時代」

変わる農村、揺らぐ天皇制国家

3 近代日本史の分岐点 254

分岐点としての日露戦後処理 「同化主義」による韓国支配

満鉄投資——ハリマン事件の謎 植民地を拠点に台頭する軍部

終章 産業革命から情報革命へ 271

相つぐ戦争と日本産業革命 日本人のアジア認識の変容 問
われる日本人の価値体系

注 284

原本あとがき 307

文庫版あとがき 312

日本の産業革命

日清・日露戦争から考える

石井寛治

講談社学術文庫

目次

日本の産業革命

序章 今なぜ産業革命か？……………11

パラダイム転換への模索 近代社会と市場経済 産業革命の
否定論 日本の産業革命をどう分析するか

第一章 外資排除のもとでの民業育成……………21

日本産業革命の前提（一八七三～一八八五）

1 一九世紀末大不況のなかの日本経済 21

「外圧」に抗しての維新変革 一八七三年恐慌と先進国の大不

況 アジアの銀本位国 幕藩営工業と明治官営事業

2 民間産業の育成策 30

岩倉使節団の海外視察 「征韓論の西郷」対「殖産論の大久保」

「国の強弱」は「人民の貧富」による 外資排除の殖産資金

3 活躍する商人 44

貿易商人の資金蓄積 為替取引のネットワーク 平民資金で

発展する金融業 製糸業にみる「企業勃興」 輸入圧力にさ

らされた在来織物業

4 世界恐慌と松方デフレ 58

紙幣整理と軍拡の同時遂行 豪農の没落、政商の躍進 没落
小生産者が賃金労働候補者に 有力ベンチャー企業、出現する

第二章 対外恐怖からの対外侵略……………73

産業革命の開始と日清戦争（一八八六～一八九五）

1 増加する輸出 73

欧米への生糸・米穀の輸出 アジア市場向けの銅と石炭

2 資本制企業の勃興 77

巨大株式会社、鉄道資本の始動 追い出される輸入綿糸 鉾

山業が守り立てる財閥 拡大する生糸・織物の国内市場 一

八九〇年恐慌と日本

3 日清戦争への道 97

変化する政府と民党の対立点 内地雜居尚早論と現行条約勵行

論 欧米商人・中国商人への恐怖 日清戦争開始への道

4 戦争を支えた経済力 110

日本銀行が資金をばらまく 日本軍の兵器と戦闘力 鉄道と
汽船で兵員をスピード輸送

第三章 帝国の利権をめぐる日露対決……………120

産業革命の展開と日露戦争（一八九六～一九〇五）

1 東アジアの帝国主義 120

露独仏三国による干渉 韓国で深まる日本の経済支配 韓国
単独支配の方針へ 最初の植民地台湾の経営 軍拡に偏した
戦後財政

2 資本制企業の展開 137

日本も金本位国へ 資本輸入を解禁したものの 日清戦後の
企業勃興 整備される間接金融体制 運輸・通信システムの
近代化 綿業での工場制と問屋制 絹業でのマニユファクチ
ュア 大小さまざまな機械工業 中国大冶鉄山に頼る八幡製
鉄所 恐慌で始まる企業集中

3 階層分化と出世回路 177

- 農村地域を巻き込む産業革命 近代都市での人口漸増 拡大
する地主制と巨大地主の欠如 「田舎紳士」でも「富豪専制」
でもなく 階層を貫く出世回路Ⅱ教育
4 総力をあげての戦い 192

京都無鄰庵での政府首脳の決断 英米と独仏のための代理戦争
開発される近代軍事技術 兵士と資金の大動員体制 戦場と
しての韓国と中国

第四章

無賠償のかわりに朝鮮・満州を……………

産業革命の終了とアジア侵略（一九〇六～一九一四）

- 1 累積する外債 209

一九〇七年恐慌——初の全般的過剰生産恐慌 織物業ですすむ
機械化 機械と鉄鋼の自給見通し 普及する電灯と電動機
貿易赤字のもとで累積する外債

- 2 揺らぐ天皇制国家 229

財閥を頂点とする富豪たち 急成長する三井物産と三菱造船

富豪の日常生活——三井家と島津家 労働運動の「冬の時代」

変わる農村、揺らぐ天皇制国家

3 近代日本史の分岐点 254

分岐点としての日露戦後処理 「同化主義」による韓国支配

満鉄投資——ハリマン事件の謎 植民地を拠点に台頭する軍部

終章 産業革命から情報革命へ 271

相つぐ戦争と日本産業革命 日本人のアジア認識の変容 問
われる日本人の価値体系

注 284

原本あとがき 307

文庫版あとがき 312